史人の、より一層の奮起を希求する博士の力強い註文と受取たいのである。—荒木敏一—

（B6本文二〇八頁年表一、教育タイムス社昭和二十五年十一月発行、一五〇円）

牧健二著　近代における西洋人の日本歴史観

「史林」の古い読者たちは、その創刊後間のないころ、その一部に「研究の栞」なる欄があり、そこに「欧米人の書ける日本史」の紹介が永きにわたつて連載されていたことを記憶せられるであろう。（六巻四号—八巻三号）グリフィス・ナホット・マードック等欧米人の手になる日本史の新古の著作約三十種を通史、時代史、特殊史等に分つて解題せられたもので、初学者のためにはまことによい手引であつた。その筆者牧健二氏はその後専ら法制史の研究に専念せられ、周知の如く、「日本封建制度成立史」以下多くのすぐれた研究を公にせられて来たが、教職を退かれて後、再び欧米人による日本史研究の成果に注目し、その研究に没頭されつつあつたが、一昨年「西洋人の見た日本史」と題して欧人の日本発見以来、日本の開国に至るまでのヨーロッパにおける日本歴史観を詳述せられたにつづいて、今回更に「近代における西洋人の日本歴史観」を著して開国以後最近に至るまでの研究を完成せられた。

開国前のヨーロッパ人の日本歴史観は、例へばケンプエルの如く、爾後永く欧人の日本に関する知識の中核となり、またその理解を限界づけたところが多く、もとより軽視せらるべきではないが、十六世の耶蘇会士以来の伝統であるキリスト教的歴史観のためにその見方が甚だしく偏つているか、乃至は極めて乏しい、多くは二次的な資料にもとずくほかはなかつたことのために全く正鵠をはずれていて、今日のわれ〳〵にもはや多く訴えるところのものを有しないと思われるに対し、明治以後のそれはヨーロッパ側においては近代歴史学の方法が確立し、その研究が精緻になると共に、他方日本との接触が一層緊密になつてその必要とする資料を自由に蒐集することができたことによつて、その知識が著しく正確となり、然もわれわれとは全く異つた立場に立つての理解であつたが故に、往々にしてわれわれが全く見得なかつたところのものをよく把えていて、そこに単にいわゆる他山の石以上にわれわれ自身の学問的反省を促すものが少くない。即ち、彼等は概してその視野がひろく、常に世界史的見地に立つて日本の歴史をながめ、彼等自身の歴史との比較によつてその性格を限定しようとするに反し、わが方にあつてはその見るところが常に国史のみに限られ、単に内からその特殊性を説くに過ぎなかつたばかりでなく、最近に至るまでは政治的、社会的制約が強く、学者が真に自由にその見るところを公にすることを憚つたがために、その歴史観が兎角偏狭固陋に陥り公正を缺くところが少くなかつた。

この点の反省こそ学問の本道への復帰であり、新しい時代の要請であると考えた著者は、それ故に西洋人の日本歴史観を説くに当つても、単にさきの「研究の栞」の場合のように個々の著作について解題的な内容紹介を試みるのではなしに、それらの著作の根柢に

ある歴史観を中心に、これを幾つかの類型にとりまとめつつ全体としてそれが歴史的に発展し来つた跡をたどり、最後に今日における日本史解釈の帰趨を見定めようとされる。即ち今その要点を摘記すれば、開国後日本研究に先鞭をつけたのはイギリスであり、公使オールコックをはじめアーネスト・サトウ、アストン、チェンバレンの如きすぐれた多くの学者を出して、新しい日本学のために道を拓いた(第一章)。アメリカ人グリフィスやフェノロサは精神的日本のよき理解者であつたが(第二章)より実証的な研究と合理的な解釈によつて、はじめて西洋人の日本史研究が日本人のそれに対してもつ優秀性と独自性を示したものは、チェンバレン等による日本神話の自由な批判にもとずく古代史の研究であつた(第三章)。日本人がことさらに批判を避けた神話的伝承に対する自由討究は、同時にそれにもとずく神道が現に行われている日本社会の後進性、停滞性についてのスペンサーやロウウェルの見解に通ずるものであり(第四章)特にその後進の程度を古代ギリシア史に対比して日本没落の必然を説いたラフカディオ・ハーンの「日本—その解釈の試み」ともなつた——と著者はいう(第五章)。ところで日本そのものが開国後異常な変化を示し、その後進性にもかかわらず漸次西欧の近代社会に近い状態に発展して行つたことは、当然西洋人の日本歴史観にも大きな変化を齎したが、この日本史解釈の新方向としてはギューリックの「日本人の進化」とマードックの「日本史」を例証として日本とヨーロッパとの文化水準の比較を説き、(第六章)、更にラ・マゼリエルやランプレヒトの日本史西欧史平行発達説について詳論する(第七章)。その場合、特にランプレヒトにおいて日本に封建時代の存在した事実が重視せられていることは、ウェーバーの如く社会の類型、文化の個性を説くものにも(第八章)また唯物史観による世界史の法則を信するものにもいずれも共通するところであつて、この封建時代の理解如何は今日においてもなお日本歴史のキーポイントであると考えられる(第九章)。最近の二十年全体主義と民主々義と二つの対立する世界観は日本歴史の理解についてもハウスホーファーとノーマンとにそれぞれの反映を見出したが(第十章)戦後に紹介されたトインビーの「歴史の研究」に見る歴史観はまた一つ新しい問題を提供する。この壮大な世界史の概観の中に認められる文明史観は一種の没落説であつて、特に日本史についていえばロウウエルやハーンにその先蹤を見るところを更に科学的に実証したものというべく、著者はこのいわば形態学的歴史観を唯物弁証法による歴史観に対置して、そこに今日における日本史解釈の最も問題となる点が存すると結論される(第十一章)。トインビーかマルクスか——それはもはや西洋人の問題ではなくしてわれわれ自身の問題である。いゝかえれば西洋における日本史研究は今や西洋人なるが故の特別の見方——それが時に誤解であろうとまた卓見であろうと——をわれわれに示すものではなくして、実にわれわれと同じ立場——それが対立する二つのいずれであろうとも——に立つ研究となつたのである。

翻つて思うに今日われわれの有する科学は人文科学たると自然科学たるとの別なく、いずれも明治以来西洋の科学を学び、その学統の移植の上に築かれ来つたものであるに対し

ただ日本史の研究のみはその対象の限定から西洋の歴史学よりもむしろ国学や水戸学の伝統を承けて発達し来つた。それがためにその方法の厳密さとその成果の高さとにもかゝわらず、そこに一種特有の学風が伴ない、他の諸科学とは異つた色彩を有つこととなり、そこにやゝもすれば偏狭固陋にして夜郎自大の弊をも生ずることとなつたのであるが、今やそのような学問の日本的伝統は全く打ちくだかれ、われわれは自国の歴史を新に世界史的に――ということは究極は西洋的に――見なければならぬような時代に達したのである。さすれば日本史を学ぶものは今まで国学や水戸学の伝統について知つていたと同様に今後は西洋人の日本歴史観の歴史について学ぶところがなければならぬというべきであろう。「欧米人の日本人観」といつた書物は必ずしも従来なかつたわけではない（確か古く文明協会叢書の中に同じ題目の書物があつた筈である）が、本書がそうした書物にありがちな多くの書物からの引用の羅列や概概の単なる紹介に終らないで、雄多な意見の間に系統を立て、それらの発展を歴史的にたどると共にその帰趨をも見定めようとつとめられたのは畢竟著者が上に述べたようなわが国史学の伝統に対する深い反省と、今後それが如何あるべきかについての切実な問題を抱いておられることから来るものであつて、著者が随所に述べられている自己反省の言葉には評者も亦共感を禁じえないものがある。

最後に著者に希望するところは、本書においてとり上げられた西洋人の諸著作は本文中においては、いずれも簡略な日本語名に訳されているが、将来の研究者のためにそのフル・タイトルを巻末にでもとりまとめて表示されると共に、引用の条項についてはやはり参照頁を記載するだけの労を惜しまないでほしかつたことである。人名並に事項索引もこの種の著作においては特に不可欠のものであることを切言したい。（B6版・二八六頁弘文堂発行定価二五〇）

―柴田　実―

米村嘉男衛著
「モヨロ貝塚資料集」

実のところわれわれが北海道網走のモヨロ貝塚の名を知つたのは昭和二十二年夏の東西考古学会及網走郷土博物館の協同調査によるのであるが、既にそれ以前三十数年に亘る米村氏の調査があつたのである。一口に三十数年にというけれど、一人の人にとつてそれがどんなに長い年月であろうか、その長い年月の間一つの遺跡の保存と顕彰に生涯の情熱をかけたモヨロ貝塚の全貌が一目瞭然と明示されたのがこの「モヨロ貝塚資料集」である。何よりも先にこの成果を導かれた氏の努力に敬意を表したい。

モヨロ貝塚はオホーツク海にのぞむ網走市を貫流する網走川の河口北岸の砂浜にある遺跡である。附近には此他にも点々と縄文式以後近代アイヌに亘る各時代の遺蹟が発見されて、五百粁に亘る北見沿岸唯一の良港である当市が早くから好適な聚落立地であつたことを示している。

モヨロ貝塚は約三ヘクタールに及ぶ保安林全般に淡鹹各種の貝による貝層が見られ、其処から二十八個の竪穴と百数十体の人骨が発見されている。竪穴は南の地区に多い大型竪穴と北の地区に見られる小型竪穴の二種類が